

## 蕪村・太祇の色紙一双 - みちのくからの来客 -

著者	藤田 真一
雑誌名	國文學
巻	98
ページ	49-65
発行年	2014-03-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/9228">http://hdl.handle.net/10112/9228</a>

## 蕪村・太祇の色紙一双

—みちのくからの来客—

藤田真一

はじめに

二〇一二年三月二十二日のことだった。まったく見知らぬ方から、思いがけないメールの連絡をもらった。宮城県加美町在住の両国潔俊という方だった。メールの文面は、十九日昼のNHKニュースで報道されたのは、地元の山のことではないか、というものだった。「そうあって欲しい」との願いをこめて連絡したとも書かれていた。

この発端は、前年十二月二十三日に京都鳥原の角屋で催された、第七回蕪村忌大句会でのことである。六回までの句会では、角屋所蔵の蕪村や太祇の書画、またその関連の作品を会場に展覧してもらってきた。その年はある所蔵家から、未紹介の蕪村作品を提供してもよいという、好意の申し出があった。そ

れは、蕪村と太祇が自句を書きつけた色紙だった。色紙は一軸ずつ対幅に軸装されていた。ありがたくお受けして、角屋所蔵の蕪村絵画作品などとともに、初公開という触れ込みで会場に彩りをそえることとなった。太祇の作はさておいて、蕪村の句は名句として周知の作であり、それが自筆で見られるというのだ。しかも蕪村にしては若書きの筆跡という珍しさも加わって、入座した俳人方の興味をかき立てたようだった。

そのとき句会報道のために、NHKのカメラ取材もあったのだが、取材した松永道隆記者がこの色紙にことさら関心をしめし、これだけ別に取材したいという申し出をされた。そこで、所蔵者に許可を得たうえで、時日を改めて取材を受けることになった。後日、やはり角屋の座敷をお借りして取材に応じた。

取材を終えて、記者から断りの発言があった。これがどうい

うときに、またどんな番組のなかで報道されるかは確約できないが、タイミングをはかつて、いいかたちで報道したいということだった。そしておよそ一ヶ月後の三月十九日、昼のニュース番組のなかでの報道となった。

それがたまたま、両国氏の目にとまったわけである。当初は近畿版の報道だと思っていたのだが、そのときの都合で全国版のニュースになり、遠隔地のひとの注意を引いたということだった。かりに地方ニュースにとどまっていたならば、その後の展開はなかったことになる。

ニュースのなかでは、太祇については言及されず、蕪村の色紙だけが取り上げられた。その映像のなかに、「薬菜山」という文字が明瞭に映し出されたのを目にして、両国氏はわが町の名山薬菜山にちがいないと判断し、しかるべき準備を整えたうえで連絡してこられたのだった。それも、「うちの山ではありませんか」という単純な問い合わせではなく、山容のくつきりした写真を貼り付けたメールを送ってこられた。これを目にした瞬間、情報の信憑性を直感した。

恥ずかしながら、それまでは「薬菜」の文字を、「蓬菜」とあるべき文字の単純な誤記と思い込んでいた。そのうえで、蕪村が揮毫してほしいと言った相手のことを感って、富士という盤

山の美称として「蓬菜山」と書くところを「薬」と誤っただけだと、軽くすませていた。ところが両国氏の教示によって、はじめて本作の重要性を自覚し、本格的に調査をする必要を痛感するようになった。

そして後日、松永氏ともども加美町を訪問して、両国氏をはじめ現地の方々から種々の教えをいただいた。さらにその後、現地調査では把握できなかった文献を求めて、東北大学を訪ね、貴重な資料の提供を受けることができた。

以上のような経緯をふまえて、本稿では、現時点で判明した事柄の報告と俳文学上の意義の考察を試みることにする。

## 一 みちのく色紙

本論にはいるにあたって、翻字とともに、ふたつの色紙の概要を示しておく。先後関係は不明なので、便宜的に蕪村の色紙を先に掲げる（句読点・濁点は適宜施す）。



まず筆跡について、簡単にふれておく。蕪村の色紙は、安永中期から晩年にいたる典型的な蕪村調筆致ではなく、明和末期ころによく見られる特徴をみせている。たとえば、明和七年に書かれた「貞徳終焉記」の識語の筆跡と酷似した筆致となっている。文字をほとんど続けないで、一字ごと分ち書きのようであるのも共通する。太祇のほうは、自筆の現存が限られているなか、やはり「貞徳終焉記」の識語や、角屋保存会に伝わる筆跡との間に共通性を見出すのはたやすい。両者とも、真筆を否定する余地はまったくない。

揮毫された時期については、双方の記事を勘案するとおよそしほられてくる。まず蕪村が夜半亭を名乗るのは明和七年三月、また太祇が没するのは翌明和八年八月九日である。両句の季語は夏、となると明和七年か八年の夏を置いて他には想定しがたい。先述した蕪村の筆跡との整合性も妥当といえる。

念を入れて検討すべきは、この二色紙が一連のものかどうかという問題である。色紙の紙質はまったく同一、サイズについては、横幅が二センチほどの差異をみせているが、縦は双方とも十八・五センチとなっている。また所蔵者によると、入手時から両色紙はいっしょにあったものだという。これもひとつの状況証拠にはなる。そのうえで何より肝要なのは、内容におけ

る関連性や一貫性を検証することである。それこそが本稿のめざすところでもあり、これから論じる内容に委ねることとする。

つぎに両者の発句に目を転じてみる。蕪村の句は、かねて名句として喧伝されている作である。晩年の「自筆句帳」にみずから並び入れ、むろん『蕪村句集』にも収録されている。生前から蕪村は、さまざまな機会に、本句を引き合いに出すことがあった。明和七年五月十三日付の江戸の楼川に宛てた書簡中に、「四季」と題して自作九句を列記するなかにも報じている。近況報告のようだが、自信作を知らせたとみることができ。また富士山を描いた自画賛のなかでも、一世代前の詩僧万庵原資の詩句「青天八染玉芙蓉」（『江陵集』巻二所収）と並べて、本句を書きつけている。

そもそも本句は、明和六年四月十日、召波亭で催された「夏より」の句会のために詠じられたとされる（尾形仿「蕪村自筆句帳」）。兼題は「更衣・若葉・閑古鳥」の三題、「若葉」の題で句稿に記録されたのは別の句だったが、こちらのほうがむしろ広く知られている。楼川に宛てた手紙に採録したのは、まだ近作報告の範囲といえるが、遠来の客にもこれを再利用したことになる。同一句を何度も、いわば使い回しするという行為をどう理解すればよいのだろうか。

太祇の句のほうは、没後に刊行された「太祇句選」やその後篇、あるいは句会記録などでもいっさい目にすることはできない。おそらく、この色紙のために詠じられた作だったのだろう。奥州の訪問客があつて、そのひとのために案じた、オリジナルの一句だったにちがいない。蕪村のごとき転用ではないということになる。むろんこれがふつうの揮毫のあり方である。

つぎに、太祇の句「蠅見ても旅をしそおもふけふは又」の身を瞥見しておく。季語は蠅で夏、ただし歳時記によつて扱いが異なる。六月とするものがあれば「花花草草」「増山井」「滑稽雑談」「俳題正名」等）、四月とするものがある（「手提灯」「四季部類」など）。その一方、夏兼三月とするものもある（「歳時記草草」「年浪草」など）。近世初期は六月に組み入れていることが多いが、おおむね時代が下るとともに、四月あるいはたんに夏とする傾向がみられる。かりに六月と特定できれば、来客の時期をしほることにつながるが、季語をもつて即断するには無理がある。

前書とともに一読、一句には、奥州から京都という大旅行をしてきた旅人をねぎらう心遣いが読みとれる。蠅の飛ぶ姿に旅の想いが触発されるというのは、いかにも俳諧的な発想といつてよい。だが、この句の理解として、單純に旅人への挨拶とい

うので事足りりとするのは、早計に過ぎる。

本句の背景に、在原業平の「からごろもきつつなれにしつましあればはるばるきぬる旅をしぞ思ふ」の歌があることは、ただちに了解される。本歌取りといつてよい。出典は、伊勢物語としても、古今和歌集としても違はないが、どちらにしても「東下り」の旅の歌だということである。すなわち京から東国へ向かう旅である。

江戸出身とされる太祇にとつて、和歌の主人公が向かった武蔵あるいは江戸は、わが故郷にほかならない。なつかしい仲間や知友のくらす町でもある。目の前を飛び交う蠅の姿を目にしただけで、旅のことが思われてならないという句ぶりを、「東下り」の本歌と重ね合わせると、作者の心がどこを向いているかが明白となる。本歌は句づくりの便宜的な技法にとどまるのではなく、作者のやみがたい望郷の念を託したものととして想起されたのだろう。江戸はそれほどの重みをもつていたともいえる。京都に移住し、島原に不夜庵をかまえるようになって、表面上は江戸への思いをきつぱり断ち切ったかみえる太祇だったところが、東国の来客を迎えて、奥底に秘められた心の動きが思わずこぼれ出たとみることができるといえる。

もしかりに、蕪村が太祇のそうした思いを承知したうえで、

「不二ひとつ」の自作を書きつけたとしたら、この富士の句の意味合いが変わってくるかもしれない。伊勢物語の同じ「東下り」の段に、「とき知らぬ山はふじのねいつとてかかのこまだらに雪のふるらん」の和歌があるのは周知のことである（古今集には未収載）。直前の文章は、「ふじの山を見れば、五月のつごもり」に、雪いとしろうふれり」となっている。来客の話に、あるいは旅上で目にした富士山のことがあり、さらに太祇の句が「東下り」に触発されたものだったとなれば、蕪村の句は、旧作とはいえ、まったく場違いの転用とはいえなくなってくる。

この仮定の当否を考えるために、あらためて詞書を含めて、一対の色紙全体を見直すことにする。

## 二 みちのくの訪問者

さらなる吟味に当って、詞書から読み取れる情報を抽出し、これを整理してみる。

まず、蕪村の色紙からの情報である。第一、みちのくからの来客があった。第二、富士山に似ているという「葉菜山」の話題があり、それにちなんだ句を書いてほしいと依頼された。第三、ちよど富士山をよんだ近作があったので、それを書きつ

けた。なお、文末に「右の句」とあるのは、むしろ「左の句」の単純な書き損ないで、過大にとらえる必要はない。

つぎに太祇の色紙を見てみる。第一、みちのくの来客の名は呂誰という人物である。第二、そのことから雁翁の近況を聞くことができた。第三、「雁翁」のことを聞いて、太祇もなつかしくてたまらなかつた。ちなみに雁翁とは、雁宕という俳人で、蕪村の師巴人の弟子、つまり蕪村の兄弟子にあたる。とくに巴人没後、蕪村は引き続き関東にあって、雁宕から受けた恩義は計り知れないものがあつた。詞書によると、太祇もまた雁宕と親交があつたことになり、いわば三者はひとつの共通の土壌をもっていたことがうかがえる。

以上の情報をとりまとめると、さらにつきのような事情がみえてくる。上洛した訪問者は呂誰という人物であつた。これは俳号とみられるので、俳人として訪れたとしてよい。この人物について、太祇は既知だつた可能性があるが、蕪村は初対面だつたとみられる。呂誰は葉菜山という山に親しみがあつて、これにちなんだ句を蕪村に求めたものの、蕪村は心当たりがなかつた。そこで富士山に似た山だと知らされて、なんとか応じられた、というのが真相ではないか。

蕪村は二十代終わりのころ、奥州を旅したことが知られてい

るが、この山には覚えがなかったのだろう。葉菜山というのは、仙台の北方にある山だが、奥の細道の旅のとき、芭蕉の歩いたルートからははずれている。芭蕉の足跡をしたって旅する俳人にとつて、取り立てて関心をそそる地とはいえないだろう。蕪村にとつてもそうだったのだろうか。

そもそも蕪村の奥州旅行の足跡については、点としていくつかを抑えることはできるものの、それらを線でつなぐことは不可能に近い。発句の前書や自画賛にするされた文章、また「新花摘」中の逸話などによつて、いくつかの土地をなぞることができるくらいである。順不同に並べてみると、九十九袋(やしゃげふ)(秋田県)・松島・仙台・白石(以上宮城県)・白河(福島県)・日光・遊行柳(栃木県)などがあげられる。これらの地名から、足跡をつぶさにつなぐことはかなわない。「新花摘」の逸話から、松島から奥州街道を南下した道筋をかううじてたどることができくらいである。「奥の細道」の跡を求めて旅する心づもりがあったかどうかすら、まったく不明といわざるをえない。

さて、ここで問題になるのは、呂誰なる人物が上洛した折、蕪村・太祇をどういうかたちで訪れたかということである。ふた通りの想定ができる。ひとつは、両者を個別に訪れたというもの。太祇の住まいは島原内の不夜庵で、蕪村のほうは、明和

七年前後だと、「室町通綾小路下町」にあった(「俳諧家譜拾遺集」明和八年刊)。歩くとき一時間ほどの距離なので、続けて訪問することはさして難儀ではない。ただそのばあい、行った順番を考へてみる必要がある。先述のように、太祇とは既知の間柄だったとすると、まず不夜庵を訪ねていつて、そのあと蕪村宅へまわつたとするのが妥当だろう。ただ、蕪村を訪問する理由や事情は、残された文面からは判明しない(確言できないながら、雁宕の縁は想像できる)。また、同一の料紙だった色紙は、呂誰が用意する必要があつただろう。

あるいは、蕪村・太祇が同席する場を訪ねたという想定も可能である。句会の記録や、さまざまに残された資料や作品から、両者が同席する機会はいくつあつたことはまちがいない。互いに訪問しあうことがあつたとしても、またふしぎではない。たまたま両者が居合わせた場に、この来訪者がやつてきて、久闊を叙し、また初対面の挨拶をかわす、そのあとこの速来の客のために、一筆の労をいとわなかつた、ということになる。この想定が成り立つとすれば、前節でふれた、太祇の新作発句と蕪村の旧作揮毫の連携という考え方が、まんざら空想でもなく、現実味を帯びてくるのではないだろうか。

京にいる太祇のもとへ、ときに江戸からの来訪者があつたこ

とはたしかである。

江戸雅光なつか訊来て、旨原・珠来などが噂申いで、予が顔の年よらぬ事、おもひしにたがへるなど、むかしがたり出て興じける、

年よらぬ顔ならべたやはつ鑿

本作は、太祇七回忌の安永六年（一七七七）に上梓された『太祇句選後篇』に収められている。旨原・珠来はかつて太祇と親交のあった俳人であり、上洛後いったん江戸にもどった太祇が編集した『夏秋集』にも、くりかえし顔を見せている。とりわけ珠来は、江戸尾張町にあった太祇の旧居を譲り受けたとされる人物である（谷地快一『与謝蕪村の俳景―太祇を軸として』三五九頁）。雅光来訪という願ってもない機会、かれらの近況に心が動かされないはずはないだろう。

ところが、江戸から太祇を訪ねてきたという、当の雅光については、なんの手がかりも得られない。旨原・珠来と親交のあった人物とおもわれるが、現時点では、詳細不明とせざるをえない。また、前書にみられる訪問についても、その時期など推測すらつかない。ただ、太祇の顔が昔のままだという印象をもっていることからすると、江戸にいるころからなじみの人物だったようだ。そのような人物が、京に上るや、太祇のもとに

顔を見せているのである。呂誰もそのようなひとりだったのかもしれない。

さて、この呂誰の名前だが、安永二年（一七七三）三月の序文をもつ、『俳諧新選』の春部に見いだすことができる。

音なして疊に落る椿かな

ムツ中新田 呂誰

所書によると、陸奥国の中新田なかにだというところの俳人だったのだ。この土地、現在は中新田・小野田・宮崎の三町合併によって、宮城県加美郡加美町のなかに組み込まれている。『日本歴史地名大系』（平凡社刊）の「中新田宿」の項目から、その冒頭を掲げておく。

仙台藩領中心部西側の交通の要衝。南北の岩出山（現玉造郡岩出山町）と一関（現色麻町）を結ぶ道から田代西越出羽道・軽井沢越出羽道が分岐し、東方への道は古川（現古川市）で奥州街道に結ばれる。当地は代官所・大肝入の所在地で、加美郡の郡政・商業の中心地であった。

奥州路の宿駅であるとともに、政治的にも経済的にも枢要の地であったことが書かれている。呂誰の実像がわからないので、上洛目的が何であったのかは知られないが、実業にかかわる用向きだった可能性がたかい。蕪村らを訪ねたのは、あくまで余禄だったのだろう。

この中新田を探るうちに、看過できない事実に会うことになった。それが、葉萊山である。ニュース番組に蕪村の色紙が映し出されたとき、文字がはつきり読めた、あの「葉萊山」である。加美町にある山で、昔から名山として地元の誇りだった葉萊山、通報の引き金をなった、そのわずかな文字によって、この一色紙ががぜん光を放つことになった。ふたたび『日本歴史地名大系』によって、「葉萊山」の説明を見ておくこととする（引用文中、小野田町は合併して加美町になっている）。

小野田町の町域中央、船形山北麓の高原にある富士山型の孤峰で、標高五五三・一メートルにすぎないが遠方からも目立つ整った山容のため、加美富士ともよばれて親しまれている。

葉萊山が「加美富士」（『大日本地名辞書』では「賀美富士」と称されるようになった時期は不明だが、呂誰が「土釜のかたち似たり」と蕪村に告げたとすると、江戸中期にはすでにこの見立てが成立していたことになる。

ここで、両色紙をめぐって、これまで論じなかったことを整理しておく。陸奥国仙台藩に属する中新田住の呂誰という人物が上洛して、蕪村・太祇のもとを訪ねてきた。太祇とは面識があった可能性があるが、蕪村とは初対面のようなだった。ただし、

雁宕とは三者それぞれに相識の間柄だったことがうかがえる。

みちのくからの訪問客に贈った色紙は、遠来の珍客にふさわしい内容だった。蕪村は、富士にもたとえられる奥州の秀峰をたたえて、富士の自作を揮毫して与えた。かたや太祇は、みずから望郷の思いを吐露してみせて、東海道を上ってきた旅人の心境に添い寄ることとした。

さて、呂誰が蕪村たちを訪れた時期について、再度考察を試みておく。蕪村・太祇の身辺状況や筆跡などを考慮して、明和七年ないし八年のいずれかの夏、というところまでしぼられた。そこでさらに、七年なのか、八年なのかを考えてみたい。

村山貞之助著『中新田町史』（一九六四年刊）に、以下のような記述が見られる。

明和庚寅年、早魃にて世上二帯迷惑に及びし所に、同八年辛卯は前年に増して旧冬より雨降らず大暑。

明和庚寅（七年）の早魃というのは、夏以降のことだろう。それが翌年まで続いて、大不作に陥ったと書かれている。地域のこうした悪条件を考えると、明和八年の早魃のさなかに、とても旅行どころではないだろう。呂誰上洛の用向きは不明ながら、これほどの大旅行をするのは困難ではないかと想像される。とすれば、上洛は明和七年の夏とするのがしぜんのようにおも

われる。

以上でふたつの色紙から読み取れることは、およそ述べきった。そこでつぎに、これを離れて、旅人の地元中新田と京俳壇の関係がどうなっているのかを考えてみたい。

### 三 「俳諧新選」と中新田俳人

「俳諧新選」(以下適宜「新選」と表記)には、呂誰のほかに中新田の発句が入集する。前掲の呂誰の一句を含めて、十一句すべてを掲出してみる(所書も「新選」のまま)。

仕丁達烏帽子に若菜摘れけり

陸奥中新田 芦風

水の中に捨子の育つ蛙かな

同中新田 不斐

音なして疊に落る椿かな

ムツ中新田 呂誰

色々に温泉の煙や夏木立

ムツ中新田 李有

諸声に山や動す樹々の蟬

ムツ中新田 楚江

嫌はる、物とはしらす茨の花

ムツ中新田 呂誰

七夕や妹が唄に次句せん

ムツ中新田 浮白

星合や樟脳匂ふかし小袖

同 如江

はつ雪の覚束なくも降にけり

同中新田 舎人

水鳥や藁火焼さす片明り

ムツ中新田 李有

人肌に合す湯婆や加減物

中新田 玄流

呂誰と李有がそれぞれ二句出しているほかは一句ずつで、九俳人計十一句となっている。季節は四季にわたっていて、偏りはみられない。それにしても広大な奥州にあつて、ピンポイントのような中新田からこれだけ集中して入集する、その背景がそれなりにあつたにちがいない。それを考える手がかりとして、雁宕の動向がひとつの鍵になるだろう。

当然ながら雁宕は、「新選」になんども登場する。春部には、「鶯や椽で物縫ふ道明寺」という句が、「下巻結城雁宕」の作者表示で見られ、以後は「雁宕」の名だけで表示される。そのなかで、巻之五・雑部には、つぎのような注目すべき作が見られる。

#### 中新田留別

寝すがたをこに残すや草の鹿

雁宕

ここに「中新田」が出てくるのである。しかも「留別」とあり、中新田の人びとに別れを告げるという前書である。たんに旅行途次の通りすがりではなく、それなりのゆかりのあつたことを示唆する。発句をみても、相当期間の逗留とその間の親密ぶり、そして旅立ちにあつたつての名残惜しさがにじみでている。太祇が呂誰から雁宕の消息をつぶさに聞いたという背景に、こゝうした事情のあつたことがうかがわれる。

ではこの雁宕の中新田逗留が、はたしていつのことだったのか。「結城市史」第五卷「近世通史編」（一九八三年刊）によると、明和元年（一七六四）七月に奥州旅行の途につき、「鄙に遊びては奥州をたどり歩行て、芭蕉の翁の跡をしたひ、柳陰にこふて奥の細道をおもひ、雨の木下にやどりては、象潟の古事をしたふ」（「たままつり」序<sup>1</sup>）という大旅行となった。ただし「たままつり」では、雁宕の遺吟が四季別に整理されているので、これによって旅行の足跡を正確にたどることはできないが、途中吟によって、おおよその経路をつかむことができる。

象潟へは九月二十五日に至り、蛸満珠寺に立ち寄って、「小鮫よる浪ふところや五湖の秋」という句を書き残した（蛸満珠寺蔵「旅客集」）。さらに外ヶ浜まで足を延ばしたのち、平泉を通過って仙台に到着したようである。

仙台はそのまま行き過ぎるのではなく、しばらく逗留することになる。雁宕十三回忌集「たままつり」所載の句によると、かつて百里（高野氏）が仙台にいたときの茅風庵に入って、道場のようなものを開いたという<sup>2</sup>。

#### 仙台茅風庵開堂

泊られよ連衆百人ひとつ蛸

こうしてみるとたしかに、通りすがりの旅客がそのまま仙台

に居ついて庵を開き、俳諧活動をはじめたようにみえる。一句からは、連衆百人が泊れるほどの空間があったようにも読める。しかも仙台には、なんと十年のあいだ居続けることになったというのだ。「たままつり」をみると、「十とせを経て故郷へ帰る」と題して、「日や月や老の植たる若さくら」等、春の三句がしるされている。明和元年に仙台入りして、その十年後は安永二年にあたる。帰郷記念の右の句からすると、結城に帰り着いたのは、三月のことだったと考えられる。雁宕はその年七月に没するので、ぎりぎりまで仙台で活動したわけである。

そこで問題になるのは時期である。「中新田留別」が明和元年の奥州旅行途次のことか、あるいは仙台滞在後の話となるのかについて試算してみる。留別句の季節は秋である。大旅行の行きがけならば、たしかに季節は合致するものの、これから津軽の果てまで行くとうるときに、途中で長逗留をするとは考えにくい。では帰郷の途中だとすると、秋に中新田を出て、翌年三月の帰郷までおよそ半年のあいだ、どこか途中で長期に道草を食っていたというのも現実的ではない。

いまひとつの可能性は、仙台逗留の十年の間に、中新田を訪れることがあって、しばらく滞在していたという見方である。仙台から現地までは、北方およそ三十キロの位置にあり、けっ

して遠いとはいえない。同じ仙台藩内ということもある。なんらかの機縁があつて、いつとき中新田の町に入り、当地の俳諧好きの人びとと交流を持ったという考え方はどうだろう。時期を特定することはできないが、その機会に、呂誰ら地元俳人と相当親しい交わりをもつということがあつた。そこで呂誰は太祇に雁宕の消息をもたらすことができた。経緯の詳細は明かされぬもの、みちのくの呂誰から京の太祇や蕪村へと、昔なじみの雁宕情報もたらされた背景として、雁宕の奥州旅行および仙台長期滞在があつたことを疑う余地はないだろう。

#### 四 京・みちのくの交誼

京の蕪村や太祇と、仙台に大きな足跡を残した雁宕とは、かねてより親密な間柄だつた。あるとき、仙台近くの新田という町から蕪村たちを訪ねてきた人物が、雁宕のなつかしい消息をもたらししてくれた。そしておそらく、請われるままに色紙をしたためて与えた。これで都と奥州とのネットワークはつながつた。俳諧ならではの遠距離ネットワークといふことができる。とはいへ、これだけで京の一大撰集に、中新田から一挙九名もの俳人が入集するというのは、瞠目に値する事態である。話

どこか飛躍があるのでは、との懐疑の念を禁じ得ない。

ここにその飛躍を埋める、きわめて注目すべき資料が存在する。まずあげるべきは、中新田（現加美町）の熊谷家に伝わる『先祖古詠写』である。<sup>13</sup> 当家は平安末期源平の争乱で活躍した熊谷直実直系の家柄といわれている。その二十四代目当主熊谷彦五郎直□（□は不明とされる）が、代々伝わる記録類を筆写・整理した文書である。巻末に「安永五年丙正月」の年記が確認される。そのなかに、つぎのような文書が見られる（一部ミセケチがあるが、修正後の文章を掲出）。

京都三宅噓山、太祇と申俳諧之宗匠 御公家様方より  
被仰付、諸国之俳士より発句を集、俳諧新選と申書二巻編  
集仕候処、安永二巳年、京都之書林野田治兵衛・橋仙堂善  
兵衛方に而板行出来、広于世被行候処、藤右衛門義、右噓  
山・太祇式人江文通を以相交罷在候に付、明和年中発句  
為相登様、右兩人より申下候間、其節相登、右書江相入  
申候。宜刻同然の書江選人候発句、乍恐筆砌之両免（句）  
の誤記か）書記指上申候。

院奥中新田 李有

いろくくに温泉の烟や夏木立

院奥中新田 李有

水鳥や藁火焚さす片明り

院奥中新田 李有

一部難読箇所があるが、文意の斟酌に支障をきたすほどでは

ない。書簡体の文面になっているものの、差し出された相手に  
ついては不明である。

概要は、京都の嘯山と太祇が編集した『俳諧新選』に自作二  
句が掲載されたので、筆ついでにお知らせいたしますというも  
ので、末尾にその二句がしたためられている。表記の小異はお  
いて、当然ながら『新選』中の句と同一である。野田・橋仙堂  
の両肆から安永二年に上梓されたという記述にも誤りはなく、  
記事の内容に問題はな<sup>い</sup>としてよい。これによると、『新選』に  
中新田から二句寄せた李有の実名が、「藤右衛門」というのだと  
判明する。かれこそ、熊谷家二十三代当主で、記録者彦五郎の  
実父にあたる。

そこで詳細に立ち入ってみると、見過ごしにできない記載が  
見受けられる。第一に、嘯山・太祇が公家方の要請によつて、  
諸国の俳諧作品を募つて一集をまとめることになつたという記  
述である。現行の『新選』のどこを見ても、公家某の関与をう  
かがわせる痕跡は片鱗すらない。遠方ゆへの誤情報ともみられ  
かねないが、嘯山が学者として仁和寺や青蓮院の侍講を務めた  
ことがあるとされ（『日本古典文学大辞典』など）、ガセネタと  
頭から切つて捨てることも躊躇される。後考をまつ、としてお  
きたい。

『俳諧新選』の凡例には、つぎのような一条がある。

此集思ひ立ぬるはじめより、何処へも句を多く得ん事を請  
しといへ共、あるは其意通せず、又は世上の常にてや、纒  
に四季一兩句など来し所々もあり。それが多くは遠つ国に  
て、再び往返せん事も心に任せず。こゝをもて止がたき事  
もすくなからず。

実際に出来上がった句集ですら、版型は小本ながら、収録句  
数三千になんなんとする大撰集である。だがこの文面によると、  
全国各地に投句の依頼をなしたものの、意思疎通がままならず、  
応じてもらえなかつたこともあつたらしい。あるいは想定した  
句数を得ることが容易でなかつたともいう。かなり遠国へも依  
頼状を送つたようだ。集句は期待通りにはいかなかつたが、そ  
れでもこれだけの成果を世に問うことができたのだ。

遠国への依頼状は、ここ中新田へも発送されたにちがいない。  
熊谷家文書は、その事実をまぎれもなく裏書きしているのだ  
る。おそらく嘯山・太祇両人の名義において、新作の出句要請  
がなされたのだろう。直接の送付先は、上洛して面識のできた  
呂誰だったかもしれないし、町の有力者李有だったかもしれない。  
ただ、個人的に出句要請をしたのではなく、その地の俳人  
全体に呼びかけられたと考えられる。それが九名の、集団入集

という成果に結びついたのだろう。呂誰の上洛と「新選」への一挙入集のあいだを埋める、きわめて具体的なステップがこの文書に記録されていたということになる。

つぎに注目されるのは、李有（熊谷藤右衛門）が以前から嘯山・太祇と連絡し合っていて、はやく明和年中には作品を送っていたと明かしていることである。この口ぶりからすると、明和八年八月に太祇が没したことを知らなかったようだ。奥州まで訃報が届くことはなかったのだろうか。「新選」は、最後まで嘯山・太祇兩人の手になるものと思いついていたふしがかがえる。

太祇のことはさておいて、京の俳諧宗匠と文通し合うようになったきっかけとして、かつての呂誰の上洛を考慮しないわけにはいかないだろう。その節、蕪村と太祇に揮毫してもらった色紙は、きつと家づととして故郷中新田に持ち帰られたにちがいない。帰郷後はその色紙を見せながら、みやこの宗匠から得た知遇を吹聴したことも想像される。そんななかで、折から京で新撰集の企画が持ち上がり、奥州からの投句をうながす依頼がもたらされた。九人ものまとまった入集というのは、そうした経緯を思わせるに十分である。その何よりの証拠が、この文書ということになる。

じつはこれと同様の文書が、おなじ熊谷家の別の資料に残されている。煩を厭わずに、原文の漢文のまま、全文を掲げておく。

洛ノ三宅嘯山・炭太祇両宗匠、触諸邦之于俳士、編集俳諧新選二卷也。安永二年、洛ノ書肆野田治兵衛・橋仙堂善兵衛梓行矣。李有（直良之排名也）、発句撰入如左。

以呂々々仁温泉乃烟也夏木立

陸奥中新田 李有

水鳥也藁火焼佐須賀多阿賀理

陸奥中新田 李有

先掲「先祖古記詠写」の文書より文章は簡潔ながら、大筋はまったく同一の内容である。表紙には「安熊谷家譜 直良撰之全」と墨書され、書末には、「于時安永五丙申年二月上旬 熊谷直良宇溪選之」という、年記および署名が認められる。さきの「先祖古記詠写」とは一ヶ月違いの筆写ということになるが、親子二代のあいだで示し合わせて、整理・筆写の作業をするようなことがあったのかもしれない。

「新選」入集の経緯の補強という意味では絶好の資料といえるのだが、この直後にいささかいぶかしい記事が見られる。

洛之蕪村之集矣。

池寒之後乃月夜乃物多羅須

全

発句は、「池寒し後の月夜の物たらず」とでも読むのだろうか。

「空(同)」はむろん李有にはかならない。蕪村の集とあるから、几童を含めて夜半門企画の撰集に向けて送った作ということが考えられる。明和末年から安永初期にかけての撰集となると、『其雪影』(明和九年刊)、もしくは『あけ鳥』(安永二年刊)に限られるが、両書にはこの句どころか、李有の名を見ることすらできない。やや広げて、安永五年の『統明鳥』にも入集はない。季語からみて、歳旦や春興の集ということは考えにくい。この記事は蕪村のもとへ自作を送ったことを述べるのみで、実際にどの撰集に収められたのか知らず、または入集の事実を確認もしないで記載したということも考えられる。あるいは、「寒し」(冬)と「後の月」(秋)という季語の扱いの不備を以て、不採用になった事態も考えられないわけではない。だとすると、『新選』と『蕪村之集』とは、採択方針のうえで、少なからず様相が異なっていたともみられる。いずれにしろ、現時点では、未確認情報の域を出ない。

ただ、かりに作品の出来映えに未熟さがあつたとして、都の晴舞台へ出そうというのだから、李有本人は自信作として送り届けた可能性はある。熊谷家の菩提寺である瑞雲寺には、この句を刻んだ句碑が存している。それほど作だったということにもなる。俳諧において、自他の評価が異なることは珍しくは

ないが、自信作が不採用になつたとすれば、その現実を前にして、われわれは当惑を禁じ得ない。

それはさておき、この李有は、俳人とはまた別の側面を持ち合わせていた。漢詩のたしなみである。仙台の富田王屋(源吉)編『仙台四時歌』のなかに、七言絶句二首が入集するのである。本詩集ははじめに、春夏秋冬の四季に分けて、すべて無題の五言絶句が収められたのち、「附録」として種々の作品が掲出される。その附録の部に、熊宇溪の名前で、「松島帰帆」と「宮城野秋月」と題する二首を見ることができると。

なおこの書には、序文や奥書に成立・出版の時期をうかがわせる記載が見られない。しかし、先掲の熊谷直良(すなわち李有)の『熊谷家譜』には、「明和七年、仙台大屋翁(富田源吉)之社中、撰仙台四時歌」などという記述のあと、右の漢詩二作が掲げられている。これからすると、『仙台四時歌』の出版は、明和七年か八年と考えてよいだろう。

『俳諧新選』に二句の入集をみた俳人李有は、また漢詩の分野でも腕前を発揮することがあつた。典型的な文人といふべきありようを呈している。さらに実世界においても、熊谷家代々肝入を務めていたところ、かれの代になって大肝入(大庄屋)へと格上げになつている(熊谷家系譜)。中新田にあつて、文字

通り八面六臂の活動をした重鎮といえる存在だった。町をあげて、遥かなるみやこの宗匠に発句を届けようという気運を醸成するにあたって、この李有が中心的な役回りを演じたと思像させるに足る人物だっただろう。

### おわりに

「俳諧新選」に登場する奥州俳人は、中新田在の人びとばかりではなかった。拾い上げてみると、仙台・岩沼・浅香・谷地森・南部といった所名ところなが散見する。このうち仙台や浅香からは、わずかに、二句程度にとどまっている。

それに対して、岩沼からは、九名の俳人が計十句の入集をみせ、また南部からは、七名が八句の作品を寄せている。いずれも季節は四季にわたっている。ひとり二句の人物が、中新田の李有や呂誰のような役柄であったかどうかはわからない。岩沼は仙台より南方に位置する地域で、逆方向の中新田と直接的な関係があったとは考えにくい。また、「南部」とある土地が、南部藩全体を意味するのか、あるいは南部という限定された町または村があったのかどうかは不明である。現在、青森県八戸の近くに南部町という町があるが、これは戦後にできた行政区画

であって、この南部と同定することは適當でない。現時点では未詳とせざるをえない。

これらの地域でも、中新田と同様、投句の呼びかけがあつて、京へまとめて発句を寄せるということになったのだろう。その際、呂誰のようなコネクターが存在したかどうかはわからないが、二枚の色紙がそのことを示唆する重要な証文であるのはまちがいない。このささやかな形見は、中新田以外でも、奥州とみやこととの連絡網があり得たことを暗示している。

さて、「新選」にみえる「谷地森」は周知の地名とはいえないが、じつは現在、宮城県加美郡加美町に属する地区である。中新田にもごく近い。となると、ここから入集していた桃有・梅有の二句は、中新田にくるめて考えるべきなのかもしれない。谷地森が、中新田に隣接するというだけでなく、両名とも、俳号からすると、李有となんらかのつながりを有する俳人かとも想像される。「桃」「梅」にそれぞれ「有」を組み合わせて、桃有・梅有とする命名法は、「李り」に「有」という方式に通じるといつてよいだろう。そう考えると、李有の存在感がますます増してくるようみえる。

今世紀にはいって、市町村合併が加速され、中新田や谷地森といった伝統ある地名がどんどん失われつつある。そんななか

で、「俳諧新選」という撰集が、はからずも奥州のかつての文化の要地に光を照射し直す働きをなしたといつてよいだろう。

〔注〕

(1) 「俳諧たままつり」は、安永二年(一七七三)七月に没した雁宕の十三回忌追善集として出版された。進歩編(進歩は雁宕の息)。千又跋。刊記はないが、年忌を考慮すると、天明五年(一七八五)の刊行と考えられる。引用は、「結城市史」第二巻・近世史料編所載の翻刻による。

(2) 茅風は百里の初号とされる。百里は高野氏、江戸小田原町で魚問屋を営んだとされる(寛文六年(享保十二年))。ただし「俳文学大辞典」等には、かれが仙台にいたとの指摘はない。ただ「結城市史」第五巻・近世通史編には、雁宕の活動として、「仙台では高野百里の茅風庵にしばらく滞在し道場を開いた」と記述されている。句は前書とも「新選」にも入集。

(3) 現在、加美町熊谷チエ氏蔵。ただし、ここでは「NPO 法人宮城歴史資料保全ネットワーク」に所蔵される写真資料によって引用する。

(4) 先掲「中新田町史」に紹介があるがものの、原文通りの正確な翻字は提示されていない。

(5) 書簡中に、「陸奥中新田」と所書を付したまま報じるのはやや不審だが、このかたちで「新選」に入集しています、という意向の表れともみられる。

(6) 注3と同様、「NPO 法人宮城歴史資料保全ネットワーク」所蔵の写真版によって引用する。

(7) 「中新田町史」によると、句碑はもと山門のすぐ西側にあったとするが、現在は熊谷家の墓碑のすぐ横にたてられている。

〔追記〕

本稿を成すにあたって、まず貴重な色紙を提供してくださいました所蔵者に感謝のことばを捧げます。また文中にもしるしたように、きっかけをつくってくださいました、両国潔俊・松永道隆両氏に御礼を申し上げたいとおもいます。そして現地調査でお世話になった、熊谷チエ氏・澁谷傳氏および加美町立図書館の方々、さらに写真資料について便宜を与えてくださった、東北大学東北アジア研究センターの方々にも深甚の謝意を申し述べます。

(ふじた しんいち／本学教授)